

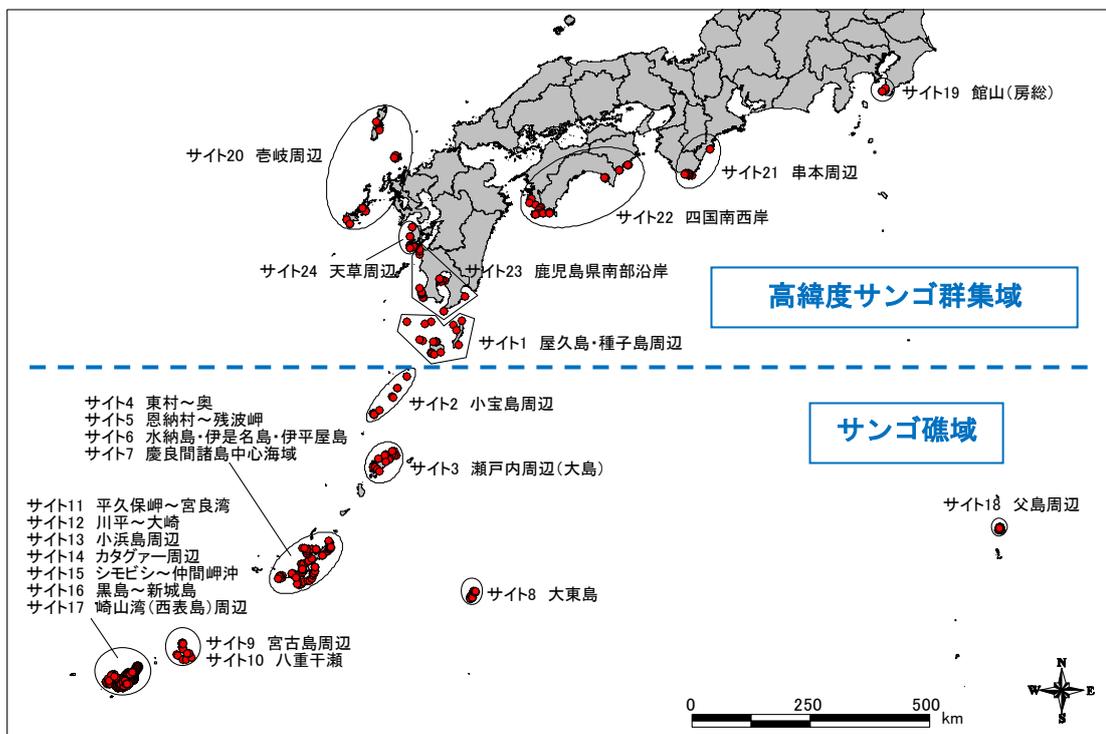
モニタリングサイト 1000 サンゴ礁

平成 21(2009)年度速報

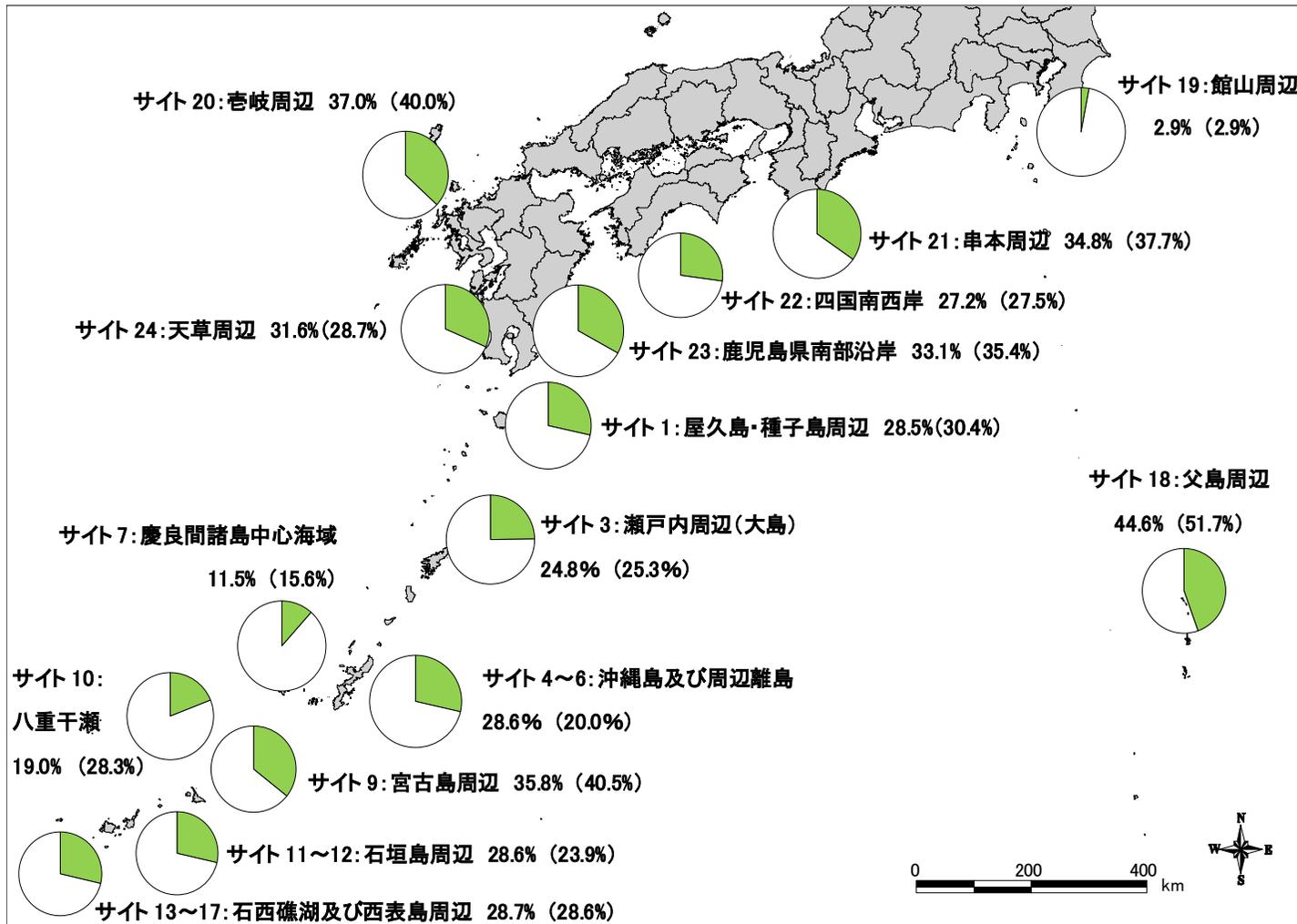
●はじめに

モニタリングサイト 1000 サンゴ礁調査では、サンゴ礁の発達する「サンゴ礁域」とサンゴ群集が生育する「高緯度サンゴ群集域」に合計 24 サイトを設置し、毎年モニタリングを行っています（小宝島周辺と大東島の 2 サイトは、遠隔地にあるため 5 年に 1 度実施します）。

ここでは、平成 21 年度に行ったモニタリング結果の概要をお知らせします。



モニタリングサイト1000 サンゴ礁調査サイト位置区



モニタリングサイト 1000 (サンゴ礁調査) における、平成 21 (2009) 年度の各サイト又は海域の平均サンゴ被度 (%)。

サイト名の後の数字 (%)、及び円グラフの緑色の部分が平成 21 (2009) 年度の平均サンゴ被度を表す。

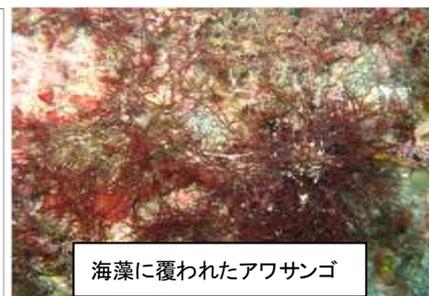
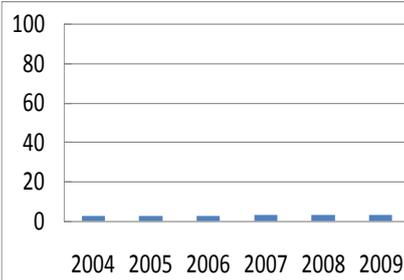
() 中の数字は平成 20 (2008) 年度の平均サンゴ被度を示す。

高緯度サンゴ群集域

モニタリングサイト 1000 サンゴ礁調査 では、サンゴ礁を形成しない温帯域のサンゴ群集分布域のことを「高緯度サンゴ群集域」と呼びます。「高緯度サンゴ群集域」は、屋久島とトカラ列島の間を境界にして、館山（サイト 19）から屋久島・種子島周辺（サイト 1）までのサイトを含みます。

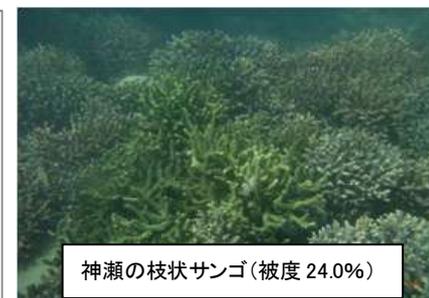
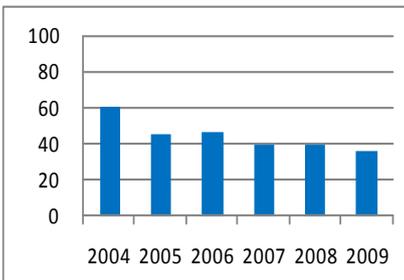
館山(サイト 19) 調査代表者:お茶の水女子大学・清本正人

平均サンゴ被度は、昨年同様、低い値で変化がなかった（2.9%）。海藻の繁茂によりアワサンゴの面積が縮小した地点があったが、新たな小群体が見られた地点もあった。



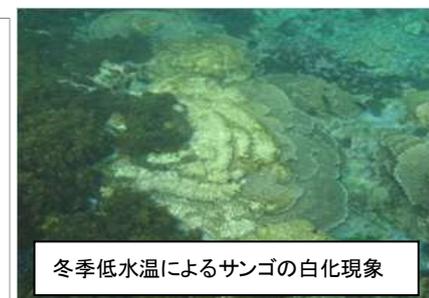
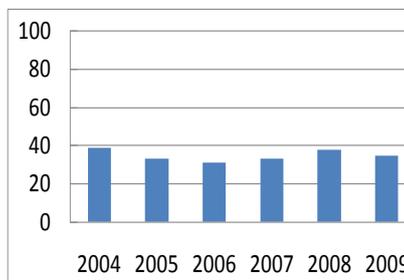
壱岐周辺(サイト 20) 調査代表者:福岡大学・杉原薫

神瀬と瀬ノ浦の枝状ミドリイシ群集は昨年とほぼ同じもしくはやや減少傾向であった。一部で被度の増加傾向が見られたが、平均被度は昨年（40.0%）より減少し 37.0%であった。



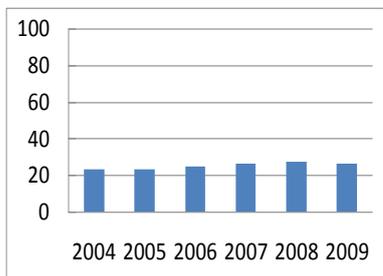
串本周辺(サイト 21) 調査代表者:串本海中公園センター・野村恵一

平均サンゴ被度は 34.8%。前年度（37.7%）からわずかに減少した。台風による被害、低水温による白化の被害が見られた。オニヒトデの小型個体が観察され、今後の被害が懸念される。



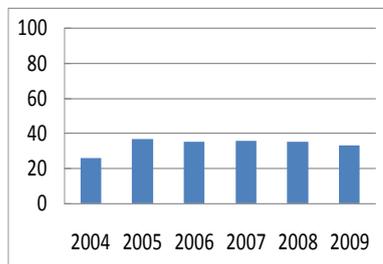
四国南西岸(サイト 22) 調査代表者: 黒潮生物研究所・岩瀬文人

平均サンゴ被度は昨年とほとんど変わらず 27.2%であった。大きく被度の変化する調査地点はなかったが、土佐湾内へのオニヒトデの侵入が見られた。



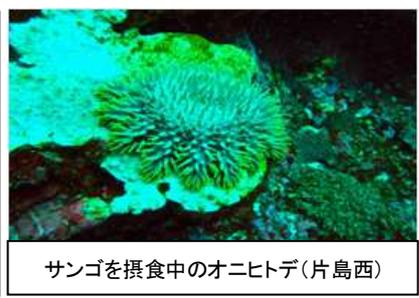
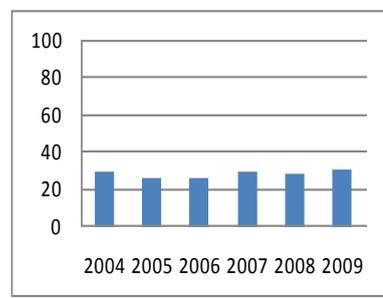
鹿児島県南部沿岸(サイト 23) 調査代表者: ダイビングサービス海案内・出羽慎一

平均サンゴ被度は昨年からわずかに減少して 33.1%であった。オニヒトデや巻貝の大きな被害は見られなかったが、病気による斃死が観察された。



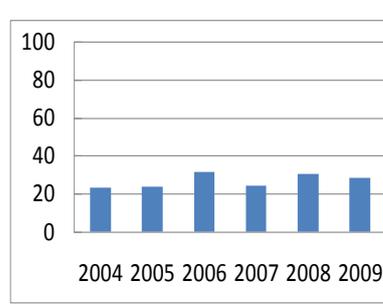
天草周辺(サイト 24) 調査代表者: 九州大学・野島哲

大きな台風もなくサンゴの生育に良好な条件に恵まれたが、片島南や大島北などでオニヒトデが観察され、今後の被害が懸念された。平均サンゴ被度は昨年より増加して 31.6%



屋久島・種子島周辺(サイト 1) 調査代表者: 屋久島海洋生物研究会・松本毅

本年度の平均サンゴ被度は、昨年 (30.4%) からわずかに減少して 28.5%であった。高水温やオニヒトデなどの被害は認められなかったが、病気と思われる群体が見られた。



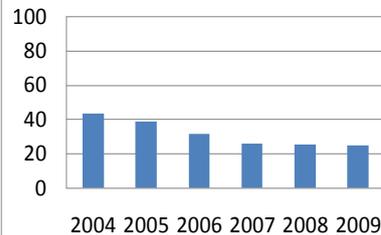
サンゴ礁域

「サンゴ礁域」とは、サンゴ礁を形成する亜熱帯域を指し、モニタリングサイト 1000 サンゴ礁調査 では、小宝島周辺（サイト 2）以南の西表島と周辺離島（サイト 17）、小笠原諸島・父島周辺（サイト 18）までが該当します。

なお、小宝島周辺（サイト 2）及び大東島（サイト 8）は遠隔地であるため、5年に1度モニタリングを行うサイトであり、平成21年度は調査を実施していません。

瀬戸内周辺(サイト3) 調査代表者・興克樹

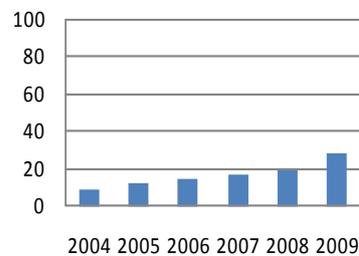
平均サンゴ被度は24.8%で、昨年(25.3%)からわずかに減少した。これは、昨年の白化の影響と思われるが、今年は新規加入群体も多く見られた。



久場地点で見られたコブハマサンゴの部分的な白化

沖縄島及び周辺離島(サイト4~6) 調査代表者:沖縄県環境科学センター・長田智史

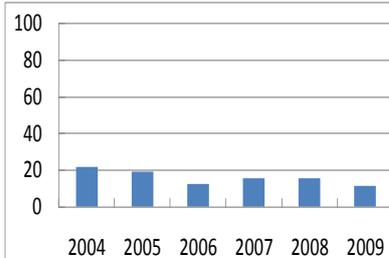
南部の海域を中心に明らかな回復傾向にある一方で、西海岸の渡具知や恩納村赤崎西、水族館西など回復が未だ見られない地点が目立つ。平均サンゴ被度は昨年より増加し28.6%。



回復が見られない水族館西

慶良間諸島中心海域(サイト7) 調査代表者:阿嘉島臨海研究所・岩尾研二

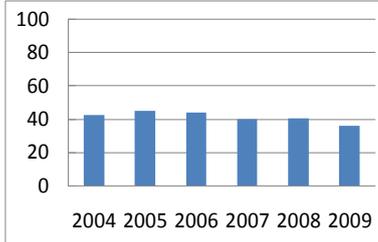
平均サンゴ被度は昨年(15.6%)から減少し11.5%。2000年以前に高い被度を誇っていた慶良間海域としては、いまだ広い範囲で荒廃した状態が続いていると言える。



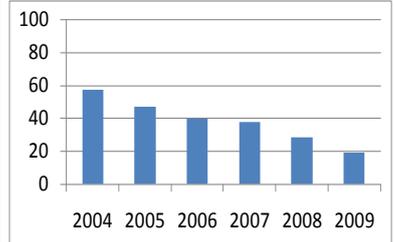
ニシハマにおける枝状サンゴの荒廃

宮古島周辺及び離礁(サイト 9、10) 調査代表者:宮古島市役所・梶原健次

オニヒトデが多い地点があり、今後の被害が予想される一方、新規加入群体が多く見られる地点もあり、一部で今後の回復が期待される。平均サンゴ被度は宮古島周辺で 35.8%、八重干瀬では 19.0%。



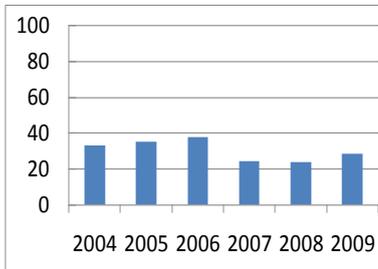
宮古島周辺



八重干瀬

石垣島周辺(サイト 11、12) 調査代表者:(有)海游・吉田稔

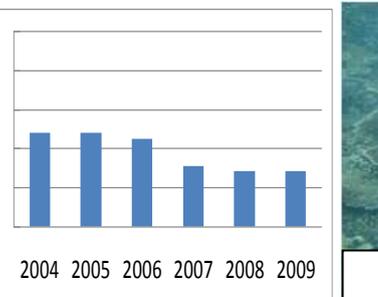
平均サンゴ被度は 28.6%で昨年(23.9%)から若干増加を示したが、全地点でのオニヒトデ確認総個体数が昨年度の2倍となり、「大量発生」の懸念が強くなっている。



St.42 で観察されたオニヒトデ

石西礁湖及び西表島周辺海域(サイト 13~17) 調査代表者:自然環境研究センター・木村匡

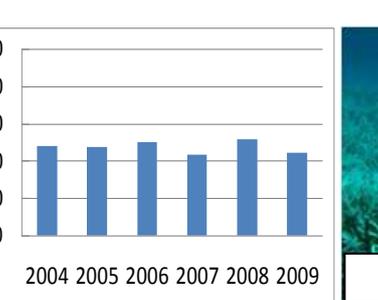
平均サンゴ被度は 28.7%であり、昨年度(28.6%)からほとんど変化が見られなかった。2007年の大規模白化現象の影響が、ようやくおさまってきたのかもしれない。



St.53 の高被度サンゴ群集

父島周辺(サイト 18) 調査代表者:小笠原自然文化研究所・佐々木哲朗

平均サンゴ被度は昨年(51.7%)から減少し 44.6%であった。過去に例のない白化現象にみまわれ、壊滅的な打撃を受けた地点もあった。



父島二見湾奥で見られた白化現象